

キサー・ゴータミー尼の物語

日蓮宗・宗務院／心といのちの講座
2015年1月30日(金)
筑波大学名誉教授 金子 保(かねこ たもつ)

Wandering the World
印度・祇園精舎

第11回「心といのちの講座」 仏教とこころの深層～物語の臨床心理学的意味～ Part 2 キサー・ゴータミー尼の物語

- Part 1 鬼子母神の物語(2014/11/18)
母性の否定的側面が主題となっている。→「鬼」とは何か？
「鬼」：人は死んで人鬼になる。大きな頭の形がこの世の人の姿とは異なることを示している。「ム」はのちに加えられたもの。雲気(云)を示すものである。のちに魂の字となる。人鬼に対して、自然神を神といひ、合わせて鬼神という。(白川静『常用字解』96頁)→「心と体を超えた第三の領域を『たましい』と呼んでいる」(河合隼雄『子どもの本を読む』講談社)
- Part 2 キサー・ゴータミー尼の物語(2015/01/30)
母性の肯定的側面が主題となっている。

「キサー・ゴータミー尼の物語」の柱立て

- はじめに
- 研究資料
木津無庵(編)1976『新訳仏教聖典』(改訂新版)大法輪閣
- 「キサー・ゴータミー尼の物語」の概要
長者の嘆き キサーの悲しみ 対機説法 覚り 出家 ほか
- 考察
愛 対機説法 キサーの回復過程 両界曼荼羅 ほか
- むすび

研究の機縁

金子 保(私・5歳)
金子キサ(母・47歳)

私の母は、42歳で私を出産している。高齢出産であった。また、私が35歳の時に、77歳で亡くなった。脳梗塞が原因だった。

なぜ、私は高齢出産で生まれたのか？ また、なぜ、私が37歳の時に、母は脳梗塞で死んだのか？



昭和21年夏 自宅庭先にて

科学と物語：説明と解釈

- 私が母を亡くした時の主治医による「科学的説明」は、よく理解できる。私が知りたいと思うのは、「私自身とのかかわり」についてなのである。→「自然科学では、個人と現象を切り離して研究がなされます。これに対して、この人は、個人と現象とのかかわりについて答えを要求しています。」(河合隼雄『ユング心理学と仏教』岩波書店22～23頁)
- 「僕は自分の人生というのを『僕の物語を生きているのだ』と思っているわけです。皆、それぞれの物語を生きている。」(河合隼雄『深層意識への道』岩波書店194頁)
- 「個々の人間がいかに自分の人生を生きるか」という臨床心理学的な問いに答える物語は、仏教経典にも、多数見出すことができる。私が仏教経典に親しみ始めたのは、19歳の夏8月の出来事であった。私の父の死がきっかけになったように思える。

研究資料

- 木津無庵(編)
1976『新訳仏教聖典』大法輪閣版
(第六編第四章第五節王寺三項四六〇～四六二頁)



物語の舞台

この物語の舞台は、釈尊在世の時代、中インドのコーサラ国シラーヴァステイ（漢訳・舍衛城）である。

舍衛城は、仏教經典にも登場するプラセーナジツ王（波斯匿王）と、その王子で後に釈迦族を滅ぼしたとされるビルーダカ王（毘琉璃王）の王国であった。その舍衛城の南方、王の宮殿に隣接して、スタッタ長者が釈尊の教団に寄進したとされる「祇園精舎」があった。

わが子を亡くしたキサー・ゴータミーは、祇園精舎で釈尊の説法に親しく接したのである。



祇園精舎の遺跡

キサー・ゴータミー尼の物語

「舍衛城には、波斯匿王が特に尼達のために建てた王寺という寺があった。吉舎喬答弥（キサー・ゴータミー）も、そこに住む尼の一人であった。

彼女の女は、舍衛城の貧しい家の娘で、痩せ細っているために、人々は吉舎喬答弥（瘦せたゴータミー）と呼んだが、前の世の善根（さちのたね）によって、福德（さいわい）に恵まれた女であった。

そのころ、舍衛城に住む名高い長者で、かつ慳（お）しみの強いことで知られた或る長者に、ふとした機会に見いだされ、その長男の嫁に迎えられることとなった。」



インド アンベール城

物語の発端：長者の嘆き



「それは、その長者が大事に蔵っておいた黄金（こがね）の延棒が、ある日調べて見ると、いつの間にかただの炭にかわっているのだ¹⁾、大いに驚いて、『これはひとえに、自分の福運（さちのめぐり）のないしるしであろう、もしこの炭を、福運の多い人が見出せば、或はもとの黄金にかえるかも知れない』、そう考えて諦めのなかに、執着（こころがかり）の思いから、その炭を籠（かご）に納めて、近くの市場にさらしておいた。」

【解釈1】長者の嘆き



○下線部1)の解釈

経済的に裕福になった長者の家では、だれ一人、炭の真価が分からなくなっていた。

長者は、嘆きに嘆いていたのではあるまいか。

まあ、なんと沢山の黄金でしょう！



「すると一日、その前を通り過ぎたのが彼女の女であったが、拙（つつまら）ぬ籠（かご）に盛られた一杯の黄金が、店頭（たんど）にさらしてあるのに驚いて、思わず『まあ、何という沢山の黄金であろう』と嘖（つぶや）いた²⁾。これをものかげで聞いていた長者は、喜びのあまりに踊り出して³⁾、のぞいて見れば果たして炭はもとの黄金に立ちかえってきらきらと輝いて居る。

長者はかつ驚き、かつその女の福運に慣れて、さては強いて請うて、ついにその長男の嫁とするに至ったのである。」

【解釈2】まあ、なんと沢山の黄金でしょう！

○下線部2)の解釈

長者の嘆きに耳を貸す者はだれ一人いない。新たに、家族の一員として、炭の真価の分かる人を求めるしかない。キサーは長者の眼鏡にかなった女性であったわけである。

長者はいわばリクルートに成功し、嘆きは喜びに変わった。「喜びのあまり踊り出た」というのであるから、悲嘆が歓喜に変貌したのである。



【解釈3】キサーの弦き声と エディット・ピアフの歌声

○下線部3)の解釈

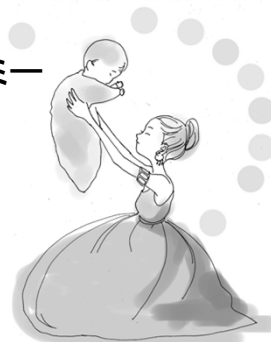
1935年、フランスのシャンソン歌手エディット・ピアフが街角を流していたとき、その「歌声」は、高級クラブの経営者ルイ・ルブレによって、見い出された、といわれている。

同じように、貧しく痩せっぽちの娘、キサー・ゴータミーが、街角の店先の炭を見て、思わず放った「弦き声」は、舎衛城の長者によって見出されて、その長男の嫁に迎えられることとなったのである。



しあわせな キサー・ゴータミー

「こうした奇(く)しき縁に導かれて、一夜にして富家(ものもち)の室(つま)になった彼女の女は、夫からも愛されて、まことに平和な楽しい家庭を結ぶこととなったが、そのうち、子供も出来て、家庭は益(ますます)その楽しさを増すこととはなった。」



思いがけない出来事

「ところが、こうした運(めぐり)のよい福運(しあわせ)な家庭(いえい)にも、いつも幸福(さいわい)の風のみは吹いて来なかった。

可愛(あい)しいひとり子が、ようようにして這(は)うようになり、立つようになったころ、ふとした病(びょう)がもととなって、ついに還(かへ)らぬ旅(たび)へさらわれてしまった⁴⁾。」



キサー・ゴータミー の悲しみ

「冷たい骸(か)を抱(かか)いて泣き叫(な)び、はては家人(かみん)の隙(ひま)をねらって戸外(かど)に飛出(と)し⁴⁾、戸毎(いえごと)を訪(たず)ね道(みち)行く人を止(と)めて、可愛(あい)しい嬰児(あかこ)の助(たす)かる道(みち)を聞くのであった。彼の女(おんな)はもう正気(せいけい)にこころを失(う)っているのである。」



【解釈4】家人の隙をねらって戸外に 飛び出し

○下線部4)の解釈

わが子の亡骸(なきが)を抱(かか)きしめて離(はな)さず、泣き叫(な)ぶキサーに、夫(おつと)は慰(なぐさ)めたであろう。

「子どもは死んでしまったのだよ」と涙(なみだ)ながらに話(わ)して聞(き)かせたにちがいない。繰(くり)返し、繰(くり)返し、夫(おつと)は言(い)聞(き)かせたはずである。夫(おつと)の涙(なみだ)声(こゑ)が聞(き)こえる。

しかし、その声(こゑ)もキサーには届(とど)かない。



気の狂ったキサー・ゴータミー

「人々は憐(れい)れには思うが、既に息絶(いきた)えたものを蘇(すべ)らせる術(すべ)もないから、ただ同情(おもいやり)の涙(なみだ)を与(たま)えるより外(ほか)なかった。

それから幾日(いくひ)か、憐(れい)れに気の狂(くる)った彼の女(おんな)の姿(すがた)の、巷(まち)から巷(まち)へとさまようて行くのが、人々の眼(まなこ)を曇(くも)らせていた。」



祇園精舎

「ある日のことである。熱心な仏の信者(よみこびで)である一人が、とうとう見るに見かねて、彼の女を呼びとめて教えた。
『妹(いも)よ、その子の病は重い、どうして世間(よのなか)の医者(くすし)の手におえるものではない⁵⁾。ただ一人、ここにその病を癒したもう方がある、それはいま幸に、祇園精舎に滞在(みとまり)しておられる御仏であらせられる』。」



【解釈5】祇園精舎の釈尊

○下線部5)の解釈

この子は「死んでいる」とか、「亡骸である」とか、「埋葬しなさい」とか、いった助言や指図をしていない。「病は重い」と言っている。しかも、「世間の医者の手には負えない」と、つけ加えている。

キサーの身になって、思わず発せられた、この一言は、キサーのころ(機根)に対応した言葉であって、正気を失ったキサーのころに届くものであった。



釈尊の受容

「彼の女はこれを聞いて、もう救われたように踊り上がり、直ちに祇園精舎に馳せつけて、世尊にお会い申して、ひたすら愛児(めでしこ)の病を救わせ給わんことを、お願い申し上げた。

世尊は、静かに彼女のいう所を聞かせられ、やがて優しく仰せられるよう。」



釈尊の対機説法



「女よ、この子の病は癒し易い、然しそれには、芥子の実を五六粒吞ませねばならない、急ぎ巷に出て、貰って来るがよい。」

世尊はそれを制めて、...

「彼の女は、余りに容易(ことやす)い仰せに、急ぎ立ち上がって巷へ駆(か)けようとした。

世尊はそれを制(とど)めて、『然し女よ、その芥子の実は、まだ一度も葬式(とむらい)を出したことの無い家、人の死んだことのないところに行って、求めて来ねばならない』と仰せになった。」



芥子の実を求めて

「彼の女には、その意味(わけ)はとくと呑みこみかねたが、いま愛児(いせまり)の危急(きせまり)の場合に、そのことを深く考えて見るほどの余裕(ゆとり)はなかった。

仰せを受けて、急ぎ巷に出て、戸每家毎(いえごとごと)に、芥子の実を乞うのであった。」



求めてもついに得られなかった！

「けれども、奇(あや)しいことには、乞われて芥子の実をくれない家とてはただの一軒(ひとや)もなかったけれども、死人(しびと)があるかと聞かれて、一度も死人を出さないと答える家は、全城(まちじゆう)の隅々に求めてもついに得られなかった。彼の女は、最初は奇(あや)しく思ったが、しかし次第に、その奇しげな意味が解(と)けて来た(6)。」



【解釈6】その奇しげな意味が解けて来た

○下線部6)の解釈

芥子の実は得られなかった。「最初は奇(あや)しく思ったが、しかし次第に、その奇しげな意味が解けて来た。」人の話が聞けたこと、思い出して悲しみ苦しむ人に出会って、おもわずキサーは慰めの言葉をかけたことであろう。ともに泣いて過ごす体験を持ったかもしれない。この、聞く、泣く体験こそ、「奇しき意味」の解ける体験であった。



身に粟の生ゆるような戦慄を覚えた



「人、生まれて死なぬものはない。家に死別(しにわかれ)の悲しみの訪れぬものはない。愛しき妻、可愛ゆきわが子、大切な両親、頼り要の夫、いずこにも、人の世の悲哀(かなしみ)はつきせない。そして最後は、その無常(かわりごと)をわが身の上に受けねばならない。彼の女は、身に粟の生(お)ゆるような戦慄(おののき)を覚えた(7)。」

【解釈7】ハッと気づいたキサー

○下線部7)の解釈

「身に粟が生ゆる」という心の状態、それは何か？ キサーは、その瞬間、ハッと気づいたのである。直観的に分かったのである。正気に戻った瞬間を示している。抱きしめているのは、亡骸であることが分かったのである。どうすべきかもわかったのである。そこで、わが子を埋葬して、釈尊のもとに再度、訪れることになる。



愛児の骸を墓場において

「もう芥子粒を乞う愚かさを、続ける勇氣(ちから)も消え失せた。仏の御語(みことば)を待ち受けないで、彼女の心には、もう法(り)の眼(まなこ)が開いているのである。そのまま、幾日かを抱き通して愛児の骸(むくろ)を墓場において、精舎(みでら)に急ぎ還って、世尊の御傍らに跪(ひざま)ずいた。世尊は、静かにこの有様を眺め給うて、次のように問い給うた。」



キサー・ゴータミーの出家

「『愛児(めでしこ)はいかが致した、芥子の実は求められたか』と問い給うと、彼の女は、御方便(みでたて)によって夢から覚め出ることの出来た喜びを申し上げ、何とぞ今日より以後(のち)、御弟子の一人に加え給う様にとお願い申し上げた。」



悪魔の誘惑

「かくて、はからずも御弟子の列に加わった彼の女は、つとめつとめて、次第に覚(さと)りの日に近づいて行ったが、ある日、悪魔(まががみ)は、彼の女を誘惑(かどわか)そうとして、彼の女の前に現れて、歌うよう。」



悪魔誘惑の歌⁸⁾

「愛し子に、
別れし汝よ、
泣きながら、
ただひとり、
などやいる。
森にとさまよ入るは、
よきつれを、
求むるならめ。」



【解釈8】悪魔誘惑の歌



○下線部8)の解釈
悪魔は歌う。それは、極めて甘く、心地よく、魅力的であって、修行の道を踏み外す危険に満ちている。
キサーは悪魔の誘惑(かどわか)の歌に対して、決然として、歌をもって、歌い返したのである。

キサーの歌⁹⁾

「愛し子に別れたる母の日過ぎぬよきつれというものも無し悲しみはせじ汝をば恐ることもなしなべて世の仇し楽しみは消え失せぬ闇を破り悪魔の戦に勝ちて悩み無くわれ」



【解釈9】エディット・ピアフの「愛の賛歌」

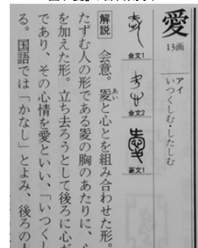
シャンソン歌手ピアフは、16歳の時、出会った少年と同様長女マルセルが生まれるが、2歳で病没している。後年、ボクシングの世界チャンピオンで、ピアフの最愛の恋人セルダンが事故死した時、ピアフは亡きわが子マルセルの名を叫び続ける。恋人の名もマルセルだったのだ。それでも、舞台に出て、「愛の賛歌」を歌う。それは、入魂の歌声であって、人の魂に響くばかりか、悪魔を退ける力を生み出すものであった。



考察1 「愛」とは何か？

- 愛(13画アイ/いつくしむ・したしむ)会意。■(あい)と心とを組み合わせた形。後ろを顧みてたすむ人の形である■の胸のあたりに、心臓の形である心を加えた形。立ち去ろうとして後ろに心がひかれる人の姿であり、その心情を愛といい、「いつくしむ」の意味となる。(白川静『常用字解』4頁)→『字通』によれば、■は「死」と「又」を組み合わせた形。
- 亡骸を抱いて離さなかったキサーの正気を失(なぐ)した行為は、わが子(=他)の病を治したい(=利)という、利他の物語であって、母性の肯定的側面を意味するものである。

図(「愛」の古代刻字)



考察2 対機説法とは何か？

- ・正気の人には「人は死ぬ」という事実が真実として受け止められるが、正気を失ったキサーには、愛するわが子の死が信じられない。正気を失ったキサーの「機」に対応した言葉は、死ではなく「生」であろう。機とは、器(キノウツワ)、素材、機根、器質の意味である。
- ・プラトンの対話編によれば、プラトンの師ソクラテスは、大工には大工の言葉を使って対話したという。釈尊は「狂気のキサー」に対して「狂気という言葉を使って語りかけたのである。また、出家したキサーは悪魔誘惑の「歌」に対して、悪魔退散の「歌」で返したのである。
- ・「熱心な仏の信者」は、「病は重い」と言い、「世間の医者の手にも負えるものではない」「その病を治したもう方が祇園精舎に滞在している」と確かな情報を伝えた。しかも、釈尊は「病は癒しやすい」と仰せられた。いずれも、キサーの心に届く言葉であった。

考察3 キサー回復の体験過程

1. 苦悩の再体験 (Re-experience) ; 聞く
2. 苦悩からの解放 (Release) ; 泣く
3. 苦悩体験の再統合 (Re-integration) ; ハッと気づく (= 直観)

(西澤哲1994『子どもの虐待—子どもと家族への治療的アプローチ』誠信書房92頁)

考察4 ハッと気づくのは「肚」の働き

- ・解剖学者・三木成夫(1925~1987)は「精神を支える二本の柱」について書いている。「切れるあたま」と「温かいところ」の二柱で、前者は「判断とか行為といった世界に君臨」し、後者は「感応とか共鳴といった心情の世界を形成」している。前者は「動物器官」が、また後者は「植物器官」が支配している。
- ・動物器官は「体壁系」といって、外皮・神経・筋肉の機能を、また植物器官は「内臓系」といって、腸管・血管・腎管の機能を支配している。体壁系の中心は「大脳」で、内臓系の中心は「心臓」である。
- ・体壁系「頭」より内臓系「肚」が重要で、「はらわた」にこそ「ほんとうの実感」がある。「肚の底からしみじみと感じること」が生きていく上で基本中の基本である。

(三木成夫『内臓のはたらきと子どものこころ』築地書館96頁)

考察4-2 頭光と身光:あたま(頭)とはら(肚)



奈良東大寺の大仏(盧遮那仏)

・解剖学者・三木成夫は、仏像の光背に注目している。頭光(ずこう)と身光(しんこう)は、大脳と内臓に対応している。すなわち、中枢神経系(大脳)と自律神経系(内臓)に対応している。理知的な表層意識と、情意的な深層意識に対応していることになる。

・さらに、「あたま」と「こころ」に対応していて、それぞれ「二つの半分」であるが、どちらかといと、「こころ」が重要だというのである。

考察5 「両界曼荼羅」の意味？

- ・「曼荼羅とは、本質心髄を有しているものであって、「自己の象徴表現」であるとされ、「人間の心の内部にある全体性と統合性へ向かう動きの存在と、自己治癒の力の存在を感じずにはおれない」(河合隼雄『ユング心理学入門』培風館233頁)
- ・「マンダラは(第一に)保守的な目的・・・に役立つ。(第二に)創造的な目的・・・に役立つ。第2の面はたぶん第1の面より、より重要であろう。」(C.G. ユングほか／河合隼雄監訳『人間の象徴(下)』河出書房新社120頁)
- ・キサーは、その瞬間、「身に粟の生ゆるような戦慄」を覚え、ハッと気づいた。それは、「ほんとうの実感」をともなった、直観的なわかり方であった。両界曼荼羅のうち、仏の慈悲力による救済の表現「胎蔵界曼荼羅」が、心理臨床の観点からは重要であろう。

中村元訳 『尼僧の告白』岩波文庫



キサー・ゴータミー(Kisagotami)尼の告白は、人生の悲惨を物語っている。彼女は、サーヴァッティ市(舍衛城)の貧しい家に生まれ、やせていたから、キサー(やせた)・ゴータミーと言われていた。嫁して男子を産んだが、死なれ、その亡骸を抱いて「わたしの子に薬をください」といって町中を歩き廻った。これを憐れんだブッダは「いまだかつて死人を出したことのない家から、芥子の実をもらって来なさい」と教えた。しかし、彼女はこれを得ることができなかった。彼女はハッと人生の無常に気付いて出家した。尼僧のうちでは、粗衣第一といわれた。以上のことは、一般の人々が経験する(死)についての反省であるにとどまるが、その告白は痛烈である。(上掲書108頁)

むすび

人は皆、それぞれの物語を生きている。
人は皆、意味志向的傾向をもって、生まれる。

姿が消えた、わが子を、地の果てまで、探して歩くキシモ。
わが子のいのちを、返してほしいと、業を求めて歩くキサー。
ともに、狂気のごとく、正気を失くし、駆けずり回る。
その母の心に届く言葉こそ、釈尊の言葉、対機説法。
その母の心は、未加護を超えた、心の中の心、奥深い心の真髄。
荒れ狂う阿頼耶識、魂の世界、光り輝く「いのち」のゼロ・ポイント。
それが仏教カウンセリングへの道。

キシモは多聞天に導かれて、釈尊の滞在する竹林精舎へ。
キサーは仏の信者に導かれて、釈尊の滞在する祇園精舎へ。
キシモは釈尊の介入が縁で、
姿を消した愛児を求めて、ホントの母となる。
キサーは釈尊の方便が縁で、
芥子粒を求め、死別のない家を求めて、ホントの母となる。
ともに、待たるは、智慧の眼。自利から利他へ、菩薩への道。



カウンセラーも、カウンセラーも、ともに歩む、菩薩への道。
それが、仏教カウンセリングへの道。

わが身の悪行に、ハッと気づいたキシモ。
深い懺悔の中で、母の中の母となる。キシモ大善神となる。
人は皆、死ぬものであるという事実、ハッと気づいたキサー。
わが子を埋葬して、釈尊の御弟子となる。キサー大菩薩となる。
阿頼耶識から噴きあがる、たましいの歌声が響き渡る。
金剛石のように光り輝いて、散華して舞い降りる。
それはカウンセリングを超えた、菩薩への道。

人は皆、意味志向的傾向をもって、生まれる。
人は皆、それぞれの物語を生きて。



以上で、「キサー・ゴータミー尼の物語」をおわります。
ご清聴に感謝します。(合掌)